

ここに帰る

和田重正に学ぶ会

題字 和田重正

ここに帰る

第八十一号

令和六年四月一日発行

目次

『あしかび』 第二号	和田重正
大きな道理に従う 勉強について	
『あしかび』 第三号	和田重正
目的をつかむ 生活指導	
『まみず』 昭和四十八年五月号	和田重正
白い杖 価値の多様化 やま5 苦味	
『まみず』 昭和四十八年六月号	和田重正
白い杖 第一の問題 やま6 願い	
国に理想を わたしの考察 その後	和田重正 角純一郎
後記	
『まみず』に出会って はお休みします	

表紙写真 犀川 白鳥飛来地

長野県安曇野市明科

撮影 平澤正義





2

発行人 はじめ塾 和田重正
昭和三十五年五月

日曜の話 五月二十二日

大きな道理に従う

この前は、人に好かれる人にならなければならぬ、という話をしました。そのためには、わざわざ好かれようとして余計なことをしないことが一番大切だ、そして本心をいつわらず、まごころで行なえばよい、ということをお話しました。

人間は誰でも人に好かれたいものだから、いろいろなおこなをする。お世辞をつかったり、おべっかを言ったりウソをついたり、金持ぶったり、善人ぶったり、強がったり、また、チンピラのように大きな黒眼鏡をかけ、いかにも頭のわるそうな服装をした

り、その他、人目を惹くようなことをするが、それはみんな逆効果しかない。

では、そんなことをなげせ人々はするのかといえば、要するにバカだから、つまろものの道理がわからぬいからだ。西へ行こうとして東に向かつて走っているようなものだ。

この前はまあこんな話をしました。今日はその続きみたいなお話をしましょう。

人に好かれるために、わざわざ余計なことをしないのが好かれる秘訣だということは、どういうことかという、実は、人間というものは、本当は人に好かれるようにできているのだということなんです。赤ん坊は好かれようなどという考えもたくらみもないから誰からでも好かれます。それがだんだん成長するにしたがってケチな悪智（わるぢえ）が出てきて、知らず知らずのうちに、またはわざと、余計な工夫をするようになるのです。そうして、だんだん嫌われるような人間になってしまふのです。そこへ気が

つけば、また赤ん坊のように誰からも好かれる人になれるというわけです。

みんなも自分自身のことをよく考えて、ごらん。気がつかないうちに人の目を惹き、歓心を買ったためにどんなにいろいろな工夫をしているかがわかるだろうと思います。もし自分には絶対にそんなことはなないという人がいたら、それは反省力のないバカかウソつきに違いない。

自分だけがいい子になろうと思ってウソを言ったり、心にもないやましい態度をとったり、強がってみたり……。子どもはどかく知恵が足りないから、そういうことになりがちなものです。もっとも、それは子どもだけでなく、バカな人は四十になっても六十になっても道理がわからないから子どもと同じですが、みんなは早くものの道理を知って立派な大人にならなければ損だ。

みんなはこんなことに気がついてるだろうか。不美人でも、無心にニッコリ笑った笑顔ほど美しいものはないということ。この美しさは、美人不美人

の区別がない、老若の区別もない。本当に人の心を惹きつけるものです。こういう笑顔のある人は人から好かれてきつと幸福になる。

笑いにもいろいろあります。いやしい笑い、傲慢な笑い、狡猾（こつかつ）な笑い、馬鹿にした笑い、にが笑い、そういう、何かを含んだ笑いは、あんまり美しいものではありません。ただ無心のほほ笑みは何よりも美しく、人の心を惹く魅力です。この魅力を身につけたいものですが、それはさておき、笑いさえもわざとすれば逆効果です。ましてウソや強がりその他の不自然なことはどんなに自分自身を醜くすることか。

ついにつけ加えておきますが、気の小さい人は、どんなに正しく親切であっても、友だちの中で人気が出ない。気の大きい人は他に大した特長はなくても人気があるものです。どうしてでしょう。正しいけれど心の小さい人は、他人の欠点が目について仕様がなない。年中人のアラが気になっているから、人を惹きつけるのに必要な無心の笑顔が出ないのです。

心の大きい人は、そういうふうには、人をさばいたり責めたりする気がないから、黙っていても時々ニコリと静かな無心のほほ笑みが浮かぶ、だから自然に人から好かれ、人気を得るのでしよう。

私は小さいときから大へん気の小さい性質だったので、まことに人気のない少年であり青年だったろうと思う。今でもあまり好かれる人柄ではないらしいが、三十年も努力してきたので、これでもずいぶん進歩したと思っています。気をつければかなりよくなるものです。

それからもう一つ。人から好かれるのに大事なことは、負け惜しみや、くだらない言い訳をしないことです。これはまた非常に人から嫌われるものです。

チャホヤとぐるりからおだてられてわがままに育っているものは、人から注意を受け、欠点を指摘されたとき素直に聞き入れることができない。どんなに好意をもって適切な忠告を与えられても、そういう人は、人から指図されることそのことで、自分の

自尊心を傷つけられたように感ずるのでしよう。理屈ではわかっていても感情が許さないので。だから、その忠告がどんなに理由のあることだとわかっていても、一言何か、言い訳をしたり、はね返してみたり、人のせいにしてたりしないでいられないのでしよう。

だが、これほど人に嫌われることはない。そしてはたの人もそういう自尊心の強い人にはなるべく忠告をしないようになるから、結局その人は誰とも本当に親しくなることもできず、社会人としては発展性のない淋しい、一人よがりの人になってしまします。

くだらない言い訳がどんなにバカげたことかということは、先日のU2型機事件に関するアイゼンハウアーとフルシチョフのやりとりによく表われています。

世界の平和を確立するために米英仏ソの首脳がパリに集まって相談しようということになっていた。世界中の人がこの会談にどんなに大きな望みをかけ

ていたかされません。ところが、その直前にU2型機事件が起こった。みんな知っていると思いますが、アメリカの黒いU2型という飛行機がソ連のずっと奥まで侵入して、ソ連の軍事施設の偵察をした。その飛行機が撃墜されて、操縦士は捕えられ、スパイであるという証拠は完全におさえられてしまった。ソ連からのこの発表を知ったアメリカはよほどあわてたとみえます。なんと叫びたかというところ、

「なるほどスパイに違いない。が、あれは四年も前からやっているのになんて急に問題にするとは、パリ会談をぶちこわすのが目的なんだろう。けしからんことだ。第一スパイということはどこの国だってお互いにやっていることだ。ソ連だって西側のどの国へもスパイを放っていることは周知の事実だ。何もアメリカだけがやっているわけではないのだ」といった具合に、カンニング学生か泥棒猫が尻尾をつかまれて理屈にもならない理屈を言ったようなものです。だからソ連はカンカンに怒って、せっかく集まったパリから、ものも言わずにサッサと引き揚

げてしまった。

アメリカのこの態度には仲好しの英仏さえも呆れあきてしまし、アメリカの国内でさえ少し正気の人には怒ってアイクの責任を問うということになっている。

つまりこんどのアメリカのやり方は全く醜態で、あらゆるものから非難されています。それはそのはずです。せっかく平和が保証されて、人類がもっと安心して豊かな生活ができるようになるだろうと待ち望んでいた矢先、アメリカのこんなバカなこと、すっかり元へ戻ってしまい、人類がまた恐ろしい戦争の恐怖にさらされなければならなくなったのだから、人々がガツカリするのは当たり前でしょう。

大統領はじめ、アメリカの首脳部の人たちは、みんな人並み以上の利口な人たちに違いない。それがなぜこんなバカな失敗をしたのか考えてみれば、第一にアメリカという国は、何でも世界一だとしんから思っ、すっかり思い上がっています。だから他からグウの音も出ないようにやりこめられるという

ことは、その傲慢な自尊心が許さなかったものでしょう。いくら頭のいい人でも、自尊心を傷つけられてグツときているときは、判断がメチャクチャになるものです。だから誰が聞いても言い訳にならないような無茶なことを口走ってしまうことになるのです。

もう少し彼らが謙遜で冷静だったら、平和を進め、全人類を幸福にするために、一時のクヤシさや面子めんづにこだわらず「遺憾であった」ぐらいのことは言えないことはないはずです。少し工夫すれば、あまりみっともなくないような外交的なことばで遺憾の意を表することはできるものです。それさえせず誰にも納得できないようなバカバカしい言い訳と責任のがれを発表して、人類を戦争の恐怖の中へ引っ張り込んでしまったのですから、アメリカは歴史の上に拭うことのできない大きな罪と恥を残したと私は思います。そうなのは、一にアメリカの傲慢な自尊心にかかっていると思います。

ずっと以前から、アメリカのことを頭のいい金持のわがまま息子だと人がよく言っていました。こ

んどの事件はまさにその正体を暴露したものだといえます。(私は今ソ連とアメリカの間の事件について話していますが、共産主義と資本主義のどっちが正しいかという話をしているわけではありません。それは全く別問題であることを特に断っておきます)。

この国と国との事件をいじめい自分の心の中の出来事として考えて、こらん。——子どもには無理かも知れないけれど、ともかく自尊心ほど自分と他人と両方を傷つけるものではありません。そんなものは必要でないし、そんなものがあるから、よけいな言い訳や責任のがれをいちいち言いたくなるのです。もっとひどいのは、「先生だって」とか、「お母さんだって」とか逆ねじを食わせたり、「A君やB君だってやっている」とアメリカみたいなのを言いたくなるのです。これでは話にならない。

人は、そんなくだらない面子や自尊心に従って行動するのでなく、ものの道理に素直に従えばよいのです。

人から与えられた忠告は一応、素直に受け取って

「なるほど理屈はその通りだ」と思ったら、素直にあたまをかけばいいし、もし、忠告を与えてくれ人の誤解や勘違いであると思ったら、ハッキリと弁明すればいいのです。それをケチな根性の人間は、理屈があるがなかるうが、ともかく一言はね返さなければ気がすまない。負けたような気がするのでしよう。

お釈迦さまというのは仏教の元祖ですが、この人は一生かかって何を説いたかというところ、

「ケチなことには一切ひっかからないで、もの道理という、悠々とした大きなものに、素直に従え。

それが自分も人も共に幸福になる道だ」

お釈迦さまという人は、仏像や位牌いはいにペコペコおじぎをしたり、長たらしい、わけのわからないお経を読んだりすることを奨励したのかと思っっているかも知れませんが、そうではなくて、「人間は悪智や自尊心のようなケチなものに従わないで、道理を知り、道理に従え」と教えただけです。

おとなのページ 投稿歓迎

どなたでも なんでも

勉強について 父母の会での話

こんどは、五月二十日の父母の会で私が話したことを要約して書きます。

今は学校でも家庭でも「勉強、勉強」と実にはげしく勉強が奨励されています。しかし、本当は勉強そのものが求められるのではなくて、実は成績もつと煎じ詰めれば、試験の点数をふやす、ということが真の目的なのだと思います。これは点数だけが語られて、教育については一言半句も語られない父兄連絡会その他の会合に一度行ってみればわかります。

ところがそんなに成績ばかり重大視し、そのあたりを食って非常に多くの落伍者（不良少年）が出るほどにハッパをかけて、それで果たしてどれだけの

効果があがっているでしょうか。少なくとも、いろいろな技術を駆使し、勉強、勉強とケシカケるせっかちなやり方では、ほとんど飽和点に近くなっているということは言えると思います。

一般に言って、この方向では、親や先生がいくら熱心にやっても大して目覚ましい進歩は期待できないと思います。この方法を推し進めていくと、一割の点数の上昇を得るために、人間として大切な他の面（身心の健康）で三割もの犠牲を払わなければならないでしょう。

われわれは、もうこの辺で立ち止まって、考え直してみる必要があるのではないのでしょうか。

今の世の中に生きて行く上には、ことに日本の現状では、学校でよい点数をかせいでおくことは有利でしょう。だから、よい点数をとらせようとすることに私は反対しようというわけではありません。ただ今日のような効果の少ないせっかちなやり方が強行され、青少年の身心の健全な発達が害せられてゆくのは見るに堪えないのです。

同じく成績を上げさせるのにも、もう少し知恵が働いてもよいのではないかと思うのです。

大きい花を咲かせようとして、蕾つぼみのところへ一生懸命水と光と熱と栄養を注ぎ込もうとするようなやり方はダメです。また、胃が弱くてからだが衰弱している人に栄養百パーセントのビフテキをいくらすすめても食べません。食べれば吐いてしまいます。そんなセツカチな療法より、一度胃を空っぽにして適当に運動をさせて、自然に食欲の出てくるような方策を考えた方が、健康回復には早道でしょう。

子どもに本当に健全な勉強をさせようと思えば、「勉強」の局面だけにとらわれないで、その子の生活全面から再調整を行なった方が、どんなに早道で、かつ根本的であるかわかりません。

そういう意味で「勉強、勉強」と子どもに直接迫ることをしばらくやめて、身心の健全なよい子になるためにはどんな条件が必要であるかを知り、自分の子のどこかにその条件のうち欠けたところがありはしないかと考えてみるのが大切だと思ふのです。

こういうことのために書かれた本もずいぶん多く出ています。そして、どれも真面目な意図をもって書かれていますから参考にはなりません。しかし率直に言って、世に出ているものは、だいたい時代思潮に阿諛した一つのイデオロギーに無理にあてはめて行こうという態度のものか、そうでなければ最近は心理学ブームで、心理学者の書いたものかです。

心理学者の書いたものは、何か非常に実際的ですぐ役に立つように人々は錯覚して、これを金科玉条とする人もだいたいありますが、よく検討してみる、非常に有益ではあるが、人々が信ずるほど実際的ではないものが多いと思います。それは一口に言えば、心理学者といえども教育についてはやはり素人であるということになるでしょう。

青少年の生活行動にあらわれるところを説明するのは心理学者の最も得意とするところです。しかし分析と解説はたとえどんなに正しくても、それに対処する方策は決して単純な理論からは出てきません。まして日常繁忙な生活をしている親や教師に実行可

能なほどに、具体的な指導は行なわれるわけにはゆきません。

そういうわけで、私は、今までどんな本を読んでも感心しながら、何か一本抜けたものを感じていたのです。ところがこの『十代の危機』という本を読んで、今までのこの方面の本と違って、本当にわれわれ、教育ことに家庭教育に責任を持つものにとつて、直接役に立つ本だと強い感銘を受けました。

この本の著者がどんな方か詳しくは知りませんが、ともかく教育学者ではなく、本当の教育の玄人だと思えます。

この本は、小さいが得難い貴重な労作だと思えます。ですから、この本の内容についてご紹介したいのですが、私の下手な話ではかえってつまらないものに作りかえてしまう恐れがありますから、みなさんご自身で、ぜひお読みになっていただきたいと思えます。

実は、この本は非行少年（昔は不良少年といった）について書いたものですが、われわれの普通の子ど

ももみな多かれ少なかれ何らかの欠陥や偏りかたよを持っています。その欠陥や偏りをよく見れば、非行少年の反社会的性格や行為に通ずるそれと同質のものであることに気づくでしょう。ですから、この非行少年のこのことを取り扱った記述は、わが子のある面を拡大して見せ、ある場合にはわが子もその方向に傾いて行く可能性のあることを示されていると考えることもできます。しかし、それほど非行というものに関係づけて考えなくとも、子どもの生活を、実際的な立場で、どのような目やすをおいて観察したらよいかということについて、実によく整頓して示してあります。

例えば、この著者は非行の発生する根本原因として精神の不安定をあげています。そして、不安定感の生ずる主な原因を、人間関係の不充足に求めています。そして人間関係を依頼関係とみて、これを上中下の三関係に分けて説明します。上というのは親や先生など、自分が頼る人との関係のことで、そういうブラさがることのできる親や何かがないときに

は、子どもは甚だしい不安定感を覚える。施設に収容されている非行少年の大部分は、親がないか、あっても頼りにならないようなものです。

中の関係とは仲間のことで、互いに頼り合う関係です。大人ばかりの中で育った子どものように対等のお友だちと遊ぶことができない子は、やはり不安定感を持つている。

下の関係とは頼られる相手を持つこと。つまり、自分より小さい子とか、犬や猫や小鳥で代用されることもある。ともかく可愛いがる相手を持つということはやはり安定感を得るのに役立つことである、ということです。

精神の不安定ということは非行のものでさえあるのですから、ましてそういう状態にある子どもが落ち着いて勉強できるはずはありません。いくら無理強いにやらせてみても、ただ本とにらめっこして時間を過こしてに過ぎないでしょう。

その他この本には、子どもの行動について実際にあ
く行きとどいた観察とその具体的指導法が書いてあ

ります。

なお、私がこの本について一番共鳴したのは、教育は力である。力のない教育は成り立たないという主張です。当たり前のことですが、これをハッキリ言い切る人は案外少ないのが現状であります。

これは戦後自由主義教育が入ってきて、従来の「権威」というものを激しく排除しました。それはある意味では正しい。「先生だから」「親だから」「上官だから」という理不尽の強制・圧迫の力を権威と解して、これを否定したのは当然であります。しかし、その権威といっしょに、先生や親の持つあらゆる力の教育的価値までも否定し去ってしまったのです。

教育は心と心との交流であり、高い方から低い方への影響であります。ですから、教育する側の人は、必ず何らかの力において優位になければなりません。知識であり、体力であり、精神力であり、洞察力であり、人格の力であり、その他、人生の経験の上から得た苦難を克服するいろいろな力があります。親や教師がこういう、子どもを信服させるに足るだけ

の何かの力を備えていなければ、教育にはなりません。

この力を子どもが感じていければ、子どもの立場からは、これが権威と呼ばれていいのだと思います。

この意味の権威は、親も教師も絶対に必要だと思えます。——つい横道にそれてしまいました。こんなことはこの本に書いてあるのではなく、私の勝手な考えなのですが、ともかくこの本では、教育の上に「力」が欠くことのできないものだ、という主張を強くしているところが私の日頃の考え方と一致するということを申し上げたわけです。

実際、親や教師は、頭の中で割り算や掛け算をして答を出して、「これでいいはずだ」などと言って責任のがれをしていることは許されません。自分は自分の手足を動かして、自分の実力を養って、子どもに対する優位を保つのでなければ、教育をするなどと大きなことを言えたものではないと思います。

自分の力の不足を訓戒でゴマ化そうとして、クドイ小言ばかり言って、かえって子どもから反感をもたれ、軽んじられるような親や教師はまことに困り

ものです。

この本にも繰り返し書かれています。無力的な教師や親ほど、多く子どもを叱ったり小言を言ったりするものです。だいたい、お説教ぐらい役に立たず、に害の多いものはありません。もし親が年中クドイお説教をしていたら、子どもは家にじっとしていられないでしょう。まして勉強なんかできるはずがありません。

私は、この父母の会が「どうしたらもっと勉強させることができるでしょう」という堂々めぐりのところからもう一步根本に遡って、本当に効果のある、教育らしい教育を考える会になることを心から願っています。

実は、私は、この会が学校のPTAや父兄連絡会のような無意味なものになることを最も惧れておりましたが、この分ならそんな心配はいらないと思っ
てよろこんでおります。

(追記) 当日、堀江会長さんの発案で、この本を

父母の会扱いとして発行所から取り寄せて会員の
ご希望の方にお取り次ぎすることになりました。

近日中に十部ほど塾に届くことになっていま
すから、どうぞご希望の方はさっそく塾へお申し込
み下さい。

『十代の危機』石原登著(国土社刊定価二〇〇円)

右の他、お母さん方に読んでいただきたい本が
幾冊あります。左記の本は塾の勉強室や図書室
にあるものですから、ちよつとご連絡下されば、
お子さんにお渡しします。どうぞ、遠慮なく。

『かこの本』ドイツでベストセラーになった異色あ
る本。最近、わが国でもこれをまねた
本が二、三出ているらしい。

『親と教師への子どもの抗議』鈴木道太著

『実話子どもの導き方』鈴木道太著

『人間を作る』

古川 原著

『中学生の心理』

波多野勤子著

『冒子の日記』

志村道子著

へ行事と案内へ

○次の日曜（五月二十九日）は休み

「野鳥と野草を訪ねる会」に参加するため、塾を二十九日、休みにします。いっしょに行きたい人は大至急申し出て下さい。満員になると締め切られます。



3

発行人 はじめ塾 和田重正
昭和三十五年六月

日曜の話

六月五日

目的をつかむこと

この頃、みんなに、漢字と英単語を毎日書いてもらっています。まだテストなどの関係で実行していない人もあるようですが、これは誰でも全部の人がまじめにやってもらいたいと思います。

ところで今までの様子をみると、大へん有意義なやり方をしている人もかなりありますが、中にはせっかく毎日百字もの漢字を書いていながら、あまり役に立たないだろうと思われるようなやり方をしている人もあります。例えば、中学生で、大、カ、川などという字を書いてくる人がありますが、そんな

字を今更書いてみても大して利益にはなりません。あるいは点の一つやたすきのあるなしなどお構いなしで書いたり、オサエルところをハネたり、とにかく気の向いたように乱暴な字を書いてきたりしたのでは、ほとんど何の役にも立ちません。

そういう人は、何のために漢字や英語を書くのか、その目的がわかっていないのだろうと思います。これは最初によく言ったつもりですが、漢字は、正確に字を覚えることと字が上手になることを目的として書いてもらっているのだし、英単語の方も、単語を覚え、つづりと発音、アクセントを正確にするのと、一年生は筆記体を正しくすらすらと書けるようになるための課題としてやってもらっているのです。こういう目的がハッキリしていれば、中学生が大山、月などの字を書いてくることもないでしょうし、中学三年生がdogやcatを並べてくることもないだろうと思います。

何事でも、自分のすることの本当の目的は何であるかをしっかりとつかむことがまず第一に大切なこ

とです。その次には、その目的を、途中で忘れてしまわないことも、きわめて大切なことであります。

例えば、さっきの漢字練習について言えば、字を百字書くのが目的ではないので、字を覚え、上達することが目的です。この目的をしっかりとつかむことが何より一番大事なことです。

それから書いているうちにいつのまにか最初の目的を忘れてしまって、ただ百字書きさえすればいいような気になったり、体裁のために書くようになってしまっただけもまたまった結果は出てきません。みんなはもう赤ん坊ではないのだから、自分のすることは何を目的としているのか、ということを見つめてしななければいけません。先生が百字書けということから書いてくるのでは、赤ん坊と同じです。書けと言われてするのはあるけれども、この行いは自分がするのだし、自分の行うことについては、自分の責任で、自分の意思で行うのでなければ、せっかく同じ骨折りをして、その結果の収穫を自分のものにすることはできません。

犬や猫や赤ん坊は、人からしむけられて、(自分の判断でなしに)何かをするから、その結果がまずくいっても、それをしむけた人が責任をもって補ってくれます。しかし一人前の人間はそうはいきません。

その代わり、自分のしたことのない結果も自分自身のものにすることができません。つまり一人前の人間は、自分の運命は自分でつくっていけるし、行かなければならないようにできているのです。——このことを知ると、われわれもいつまでも赤ん坊のときのようにポンヤリと人から操^{あやつ}られるままに生きていくわけにはいかなくなります。自分の行為の一つ一つについてその目的をよくつかみ、目的を本当に達するように工夫してゆかなければならないことがわかるでしょう。

だいたい自覚のない人間ほど、自分の行動の目的を理解していないものです。犬や猫や赤ん坊は、自分の行動の目的を理解していません。ただ本能によって目的に沿う行動をさせられているだけです。

反対に、立派な人ほど自分の行動の一つ一つにつ

いてチャンと目的を持っているものです。何となくするということはありません。だから同じだけのエネルギーを使っても、そういう人は、非常に能率のよい結果を得るわけです。

数学のできない人は、大い目的を知らなかったり忘れていたりする人です。幾何の「証明」ということがどうしても呑み込めなかったり、分数の加減や因数分解や連立方程式の解法の呑み込みにくい人は、みんな仮設の整頓や式の変形は何の目的に向かってしているのか、ということのわからない人です。

こういう人は、いくら長い時間かじりついていてもわかるようになりません。まず目的をしっかりと肝に入れる。これが解決の第一歩であり、それができれば半ば以上は解決に近づいているのです。

学校へ行くのは、勉強しに行くのです。勉強が目的です。それなのに、赤ん坊的な無自覚な子は「こんなカバンはみっともなく持って行けない」「こんな靴じゃ恥ずかしくて行けない」と本気でそう思っ

て駄々をこねることがあります。まるで学校へみっ

とも、のために行くような根性であります。この根性こそ幼稚で恥ずかしいものなのに。なるほど男の子が赤いカバンや黄色い傘を持って学校へ行くのはいやでしょう。それはみつどもどころではなく、精神異常者だと思われるから、いくら親の命令でもしない方がいい。しかし、少しぐらい旧式だったり、よごれたりしたもを持って行くのがいやだからといって学校へ行かないというのは本末でんどうであつて、学校へ何しに行くのかわかりません。ハッキリと目的をつかんでいれば、途中にどんな障害（じゃま）があつても、忍耐したり、努力したりしてそれ乗り越えて目的を達するものです。

人の掃除ぶりを見てみると、その人がどのぐらい自覚しているか、つまり目的をハッキリつかむことのできる人であるかが実によくわかります。だから子どもの精神的成長の度合を見るには掃除をさせてみるに限ると私は思っています。

「役割として決まっているから」とか、「命令されるから」行うという赤ん坊精神でやっている掃除は、

どんなに、いねいにやっているようにみえても必ずどこかに大へん間の抜けたところがあるものですが、自覚のある人（目的をしつかりとつかむことのできる人）はチャント急所急所は行き届くものです。

塵^{ちり}や埃^{ほこり}を除き、物を整頓して居心地のよい場所にするという掃除の目的を心得ていけば掃除になるのですが、義務を果たすとか体裁とか余計なことに目的がすりかえられてしまつては、どんなに、いねいそうに見えても掃除にはなりません。義務もへチマもない、目的になつた正しい掃除をしさえすればよいのです。勉強もその通り、命令や体裁や親のため、その他余計なことののためにやっている勉強は、時間と精力を多く費やして実はまともな勉強にはならないから、その割に能率はあがりません。単純に知識や技能を身につけるといふ勉強の目的だけを眼中において、せつせとやればそれが本当の勉強です。

ここで一つ注意しておきたいことは、試験勉強のことです。

教育上のむずかしい理屈はさておき、試験を受け

る側から言えば、一番目的にかなった結果は100点をとることです。その次は99、次は98、なにしろ試験を受ける以上一点でも余計点を取らなければなりません。要するに点を多く取ることを目的とします。

試験に臨んでは点取虫になるのがよいので「点なんかいらぬよ」とうそぶいているのは、決して利口な振舞いではありません。もちろん、カンニングは絶対にいけません。それ以外の工夫でなら、なるべく要領よく点を多く取る方がよいのです。しかし平生の勉強は、身になる力をつけることが目的だから、年中試験対策みたいな勉強の仕方をするのは本当の点取虫でバカらしいことです。しかし、試験に臨んだ時は別です。私は試験には最も能率よく点を取るように工夫し、それに成功するような人でなければ、大人になって仕事をうまくやって行けないと思えます。試験で、いい点を取るのにはどんな勉強の仕方をしたらよいかと工夫するのは、決していやしいとかみっともないことではなく、素直な立派なことだと思います。

目的ということを言ったから、ついでに付け加えておきますが、一つ一つの行動の目的でなく、人間の一生の目的を何か持っている人は幸福です。何かこういう仕事をしようとか、こういう人になろうとかいう目的か目標を持っていれば、その人の生活はすべてその目的のために自然に統一されます。そして長い年月の間にはそれが達せられるか、それに近づくことができるものです。一生の目的や目標（あるいは理想といってもいい）を持たない人や途中でそれを忘れてしまった人は、どんなに忙しく働き、どんなに大げさな仕事をして、いわゆる酔生夢死という情けない一生を過ごしたことになります。

みんなが今すぐにそういう目的や目標を持つことは無理だと思えますが、なるべく早くこういうものをみつけて一生の方針を定めることは望ましいことです。そして、どうせ持つなら、人に嫌われたり軽蔑されたりするようなことなく、人から好かれ、よろこばれることにしたいものです。

どなたでも なんでも

生活指導

○ 子どもの気持を知らなすぎるのも困ったものだが、知っていると思いつぎるのも困りものだ。

○ 近頃の教育者やインテリの親は子どもをなめすぎている。心理学や教育技術が進歩し——というほどではないのに——一部の有力な影響力を持った人々の間でむやみとそれがもてはやされ、過信されてきたために、子どもをあやつる手練手管が多くなりすぎている面がある。子どもはあめでからだをさすずられていような気持がするだろう。「わたし、反抗期だもん」と手元を見すかされ、逆手をとられるのがおちだ。

○ 生活指導——徳育、性格育成の面でことに甚だしい。子どもの気にさわらぬようにと千々に心をくだき、厭あかせず、そらさせず、おもしろおかしく教えようなどは飛んだ見当違いだ。親切すぎるのは子どもはきらいだ。まともな子どもが本当に求むるもの、本当に心を動かすものは、あめやおとぎばなしや漫画的な面白味ではない。

○ 子どもの本心は何を求めているか。目を見据えて、真向から説かれる人生の真実、単刀直入に示されるものの道理そのものだ。

○ 割引きのない一個の人間として立たされ、手加減のない生まのままに注がれる人生の知恵だ。それはあたまではわからなくとも、こころにはしみ込あむ。

○ この事実を、われわれはもう一度省みなければならぬ。

○ 日曜の話を書く子どもらの顔を見てつくづく感しさせられている。どんな下手クソな話でもよい、少しぐらい論理のちようつがいはずれていてもよい。ことばの意味もろくにわからないような小学生でも、本当の話のときにはどんなに目を輝かせるものか。あの目の輝きが無意味であるはずはない。

○ 「ウソを言うのはバカなんだよ」というのは私の生命がけの人生体験の中から出た知恵なのだ。だから私がこう言ったときはどんな子どもでも、キツとなって受け止めてくれる。

「ウソを言うのは悪いことである」と英作文の練習問題のような文句を私が荘厳な口調で言ったとしたら、みんなはどんな目つきをするだろう。

○ 「ケチな根性はいけない」これは私の五臓六腑から絞り出された懺悔のことばだ。だから、子どもはしんとして聞いてくれる。その合理的な説明は、ほ

ほとんど不可能かと思われるほどこのことばの含むものは深く多様である。しかも悪智によって自ら盲いた大人でない限り、このことばによって白道びやくどう（いのちの道）を発見するはずだ。事実、新鮮な子どもたちは、まずいこのことばをよろこんで聞いてくれる。

○ 「我執は罪である」「利己主義は不道德である」「人には親切にしなければならぬ」と私が真面目くさつて言ったら、悪智の大人たちは納得してくれるかも知れないが子どもたちからは見放されるだろう。

○ 生活指導や道徳教育の根本は人生観教育だ。人生観の確立のないところに確かな指導も教育もあり得ない。一にも人生観、二にも人生観。すれば、すべてはととのつてくる。よけいな訓話やお説教は困惑と反撥の原因になるだけだ。

○ 人生観の異なるところには異なった道徳が生まれる。人生観、世界観の如何にかかわらず、妥当する

よくな道德律などあり得るものではない。

もしあるとすれば、甚だしく抽象的・観念的なもので、実践的には無意味なものだ。世に、倫理・道德と称せられるものは、いろいろ解釈や、言い訳がつけられたとしても、みな、そのようなものの可能を前提として立てられたものだ。だから、得か損か、生か死か、乗るかそるかかの決定的瞬間に、道理に従った行動をとらせるほどの力を持たないのだ。それは失ってもいいのちにかかわりのないほどのアクセサリーにすぎない。

○

はじめ塾の世界観・人生観によれば、前述のような道德は無意味であり、そのような道德教育は偽善者とノイローゼをつくるに役立つだけで有害無益だということになる。

われわれは、道德という衣を着せられるその以前のありのままの人間から出た——人は何を求めているか、如何にしてそれを求むることができるか——こんなところから出発して、われわれ自身の行動を決め

て行くことを考えているだけである。

道德という虚名を冠することさえ許されない。



まみず

昭和四十八年
五月号

価値の多様化

白い杖
28

はやく言えば何を美、何を善とするかが、人々によってまちまちになってきたということだろう。これは人々の価値観の進歩の可能性を示すという意味で歓迎すべき現象だ。しかし多くの薄っぺらな尺度保持者が、一人前の顔で横行する状態がよいのではない。その中により深い根柢のある価値観を探る動きがなければ、折角の多様化が無駄になる。個人の内面にも価値観の多様化が起こっている。より深い統一的価値観への努力がなければ、その人は悔いある人生を送ることになるだろう。

やま 5

苦にが
味み

和田 重正

(小田原はじめ塾)

フキノトウやサンマのはらわたは苦味があるから美味しいので、もし苦味がなかったら間の抜けたつまらない食へ物だろうと思います。しかし苦味も度が過ぎてセンブリやクマンノキみたいになったら、どんな豪傑でも美味しいとは思わないでしょう。

渋味についても同じことが言えます。山のウドやタラの芽には、いくらかの渋味があるので、(美味いと言ってるかどうかはわからないが)ともかく独特の食欲を催させます。

しかし渋柿の渋ほどになると、食欲どころか大へんな不快を感じて呑み込むこともできません。

そうしてみると苦味とか渋味というの、その味そのものは美味いではなくて、極く僅か他の味と混っていると全体の味を引き立てる役をするものようです。美人の描きほくろのようなものでしょうか。その点では塩からさも同じことかも知れません。ただ苦味や渋味とは程度の差があるだけかも知れません。塩あんばい梅はいということばの示す通り、塩からさは酸味などとうまく混ぜて食物全体の味を複雑にし、その調子を高めることができるわけです。しかし塩だけなめては、美味くはなく却って苦痛を感じます。

それでは甘味はどうでしょう。実はこれを書きはじめたときには甘味は単独でも、またどんなに濃くても美味しいものだから、これは他の味とちがって、それ自体が美味いものだと思っていました。ところが書きながらよく考えてみると、これも程度の差に過ぎないらしいと気がつきました。いくら甘党でも、砂糖ばかり百匁（三七五グラム）も食べたなら、美味いどころでなく氣持がわるくなってしまいうでしょう。

そうしてみると味そのものに美味い味、不まず味い味というものがあ
るわけではない、という極く当たり前のつまらない話になってしまいました。

だけでも私の言おうとしたこと

は、そういう味の性質についての自分の意見ではないのです。実は苦味とか渋味のような本来好もしくない、——もっと正確に言えば、不快な味でも使いようで食物の総合的な味を非常に深みと趣のあるものにする事ができるという事実を言いたかったのです。苦味や渋味が本来人間にとって好もしいものでないということがどうしてわかるかと言えば、そういう味が少しでも混じっていると、幼児や子どもは必ずそれをいやがるからです。苦味や渋味がうまく感ずるのは原則として大人ばかりです。お茶でもコーヒーでもビールでも小さな子どもは好まないのが普通です。

それではどうしてある程度の苦

味や渋味が大人になると美味しく感じるようになるでしょう。それには生理学的な、または心理学的な解釈があるのだと思いますが、どのように説明されているのか私には知りません。ただ自分の体験を反省してみると、苦さや渋味のような好みからざる刺激を受けると、それに対抗しようという力が働いて、味覚に特殊な鋭敏さを生ずるのではないかという気がします。その鋭敏さは活力の一つの現われであり、それによって爽快さを感じるのではないかと思えます。そして、そのような抵抗力を生じ、それを爽快と感じるのには、幼児や子どもの生命力はまだ充分強く鍛えられていないのではないかと思います。

これは味覚の味に関する話ですが、私は視覚にも同様なことがあるような気がします。自然の物にも景色にも苦味や渋味をもったものがあります。というより、自然の物には大抵い多少ともそれらの要素が含まれているように感じられます。ところが人間によって作られた風景や植物には、それらの要素が引き取られた、キレイだけのものが多いように思います。それは丁度甘いだけの子ども向きのケーキのようなもので大人にはある種の刺激が足りません。昔、浮間ヶ原や田島ヶ原（荒川沿いの広い草原）に自生していた桜草と改良された高級な日本桜草とをくらべてみればわかるでしょう。改良された桜草は実に見事です。本当

にやさしくキレイだと思えます。しかしそれには涙を誘う？ 苦味も渋味もありません。改良されたバラやボタンも見事です。私はそれも大好きです。しかしそれには何か足りないものがある。ただ明るくキレイなだけで、かげと涙が欠けているような気がします。「キレイだなあ」とそれだけで、悩みがない——これは少々言い過ぎかも知れないけれど。もしかすると人間にもこんなことがあるかも知れません。昔は砂糖漬けのようなノツペリした好男子より苦味走った能い男の方が値打があるように言われたものらしい。今のいい男の中にも女から見るとそのような種類があるのかも知れませんが、もしあるとすれ

ば面白いことだと思えます。

さてマクラがだいぶ長くなりましてが、われわれがこの世で生きて行くうちにはいろいろな目に遭い、いろいろな味あわされまゝです。無味という平穩無刺激な状態を続けることはめつたにありません。お米のご飯のような淡泊な味だけということはあるでしょうが、それが少し長く続くと何か味の濃いかおかずが欲しくなつて甘い刺激からい刺激を求めます。甘い刺激の代表的なのは愛情のやり取りでしょう。からい刺激は腕試し、カ試しになるような困難に立ち向かうとき得られます。

甘味やから味やせいせい酸っぱ味ぐらゐまではよいのですが、われわれは時々苦しい思ひをさせられ

ます。時には呑み込み難い渋い思ひをさせられることもあります。

信賴していた人に裏切られるとか、返せない借金を厳しく催促されるとか、入学試験におつこちるとか、息子が不良で警察のご厄介になるとか、いろいろ苦しい思ひを味わうことがあります。

また、言い訳のできない状態で人から誤解を受けたり、思ひもかけない陰口を知らされたり、なんとも呑み込みようもない渋い思ひをさせられることもあります。失恋などは苦と渋を兼ね具えているのかも知れません。

これらの苦さや渋さがさほど濃厚強烈でないときには案外生活の張り合いや励みや場合によっては自分への信賴感の増強に役立つこ

ともあります。言わば生活の單調さを破るのに役立つこともあるわけです。

しかし苦さや渋さの度が過ぎると放つておけないことになってきます。そうなるのとそれから逃れようとしていろいろにやりくりをしはじめます。さあ、そうなつたら大変です。不快感どころでなく目も耳もまともに働かないほどに心が乱れてしまいます。

そんなことはそう年中あるわけではありませんが、それでもわれわれ凡人はたまにはそういう破目に陥ることがあります。そのときどうしたら自分の生活を破壊しないで済みますことができるでしょう。

私は生来気が小さいせい、修養がないためか、少し強い苦味や

渋味を飲まされると、もうそれが苦になって、そのために生活が正常さを失ってしまいそうになるのです。それは自分自身にとって非常な損になると思っているので、口に入れた苦味や渋味を無視しようといろいろに工夫してみるのですが、少しも成功しません。実際に苦いのですから、それを無理に無視したり否定したりすることはできないのです。

そこで、そのようなやりくりによって苦痛を増幅することをやめます。そして苦渋を吐き出そうとしたり無視したりしようとせず、そのままに受け容れてじっとこらえていけば、そのうちに溶けてどこかへ消え去って行くことを知りました。ところがそれは容易なら

ざる忍耐を要することです。強烈な苦味や渋味を口に入れ、喉につかえている時は、朝目が覚めるとまずその苦味渋味の存在が気にかかります。そして一度に頭に雲がかかったような重苦しい気分になってしまいます。これが時の経過と共に解消するのを待つというのは、よほどの忍耐力を要することです。こんなことは誰でも経験していることで別段珍しいことでは

ありませんから、長々と述べる価値のないことだったかも知れません。でも話の順序として止むを得なかったのです。

話が突然飛躍しますが、よく晴れた星空を眺めたときひとほとんどな感じがするのでしょうか。この難

問は必ずしも星空についてはかりでなく、花でも景色でも、ともかく自分が深く感動するものについて同じことを思うのです。たとえば、冴えた黄色の菜の花を見たとき、自分はいつもあるきまった感じを感ずるので、他の人も、自分と同じ内容の感じを感じているのだろうか、それともこの感じというものは、その人の過去の経験の違いによって異なるものなのだろうか。この疑問を私は小学生時分から抱いていて今でも持ちつづけています。どうも同じじょうでもあり、違ってもあります。

ですから私が星空を見て感じることをここに書いてみても、ひとに通じるかどうかはわからないと思っておりますが、それでも私は今そ

れを言ってみないでいられない気がするのです。

私は夏でも冬でも星空を眺めると、実にほどよい充実を感じるのです。それはずっと若い時から今まで全く変わらないのです。その感じの内容を説明することはおろん不可能ですが、その要素の幾つかを抜き出してみることが出来ます。第一に、天空と自分とが同じ大きさである—だから、星は遠いのだ、宇宙は大きいのだということはありません。つまり星空を眺めているときには、大きさとか遠さという感覚が無くなってしまします。ですからむしろ時間もありません。したがって自分が年寄りか若いかという感覚は無くなっています。それからもう一つ、

そこには欠けたものがありません。それは、完成している、というのとは違います。そんなに調ととのっているのではなく、もしかするとそこには何も無いのかも知れません。しかし欲張りさえしなければ何でも引き出すことができるのでしよう。温かみでも味でも。

私を感じるほどよい充実とは、すべての色を含む太陽光線の無色と同じ性質のものかも知れないと思います。

ともかく私は星空を眺めると無心の幼児が暖かい春の光の中で快さにささえも気づかずに遊んでいるときの有様はこんなものかと思われるような状態になります。そこではどんな激しい苦味も渋味もフキノトウやウツロのそれのようにい

のちの美味さを引き立てる役をするように思われます。星空と自分のいのちの総体はそれほど大きいということでしょうか。その中にはほほえみも涙もあって私の胸を星空いっぱいにくぐらせてくれます。星空はそんな不思議な力をもっています。しかしそれは実物でなければなりません。記憶の中の星空からは何の実感も出て来ません。実物に接しなければ物そのものの味が出て来ないのは、星空ばかりではありませんけれど、人生最大の苦渋をもフキノトウの苦味ほどにしてしまいう星空の実力は、その実物からだけしか出て来ないのは当たり前でしょう。

よく晴れて真暗な星空を、無心で仰いでみてください。

第一の問題

白い杖
29

今、子どもたちにとって真の問題は何であるか。それを正しく明らかにすることが教育の根本である。人間にとって解決すべき問題は何であるか。それを正しく明らかに知ることがよい人生を送るのに大切な急所である。子ども自身が何を問題にしているか、人間が現実に関問題をにしているか、が主要第一の問題なのではない。それは第二、第三の問題に過ぎない。多くの教育者や生活者は第二、第三の問題にとらわれて肝心の要に届かないのだ。

やま
ら

願
い

和田 重正

(小田原はじめ塾)

今朝M君という人がヒョッコリ訪ねてきました。M君は戦争中中学生で私の家によく出入りしていた人です。よほど苦労したとみえ、年に似合わずふけてみえます。その苦労とその末に得たものについて語ってくれました。

M君は終戦後しばらく学校の先生をしていましたが、体をこわして勤めをやめました。その後健康を取り戻してから、勉強塾をはじめました。人柄がよく、指導も行き届くので評判がよく、塾は繁昌

しました。しばらくの間に立派な家を新築するほど順調でした。

ところがM君は何時の頃から競輪に凝りはじめました。だんだん深入りして、年中お金の工面に気を配らなければならなくなりました。ぐるり中の人々から借金をします。そのためには幾つものウソを言わねばなりません。しまいには女房の貯金まで無断で引き出して使ってしまうほどになりました。そしてとうとう折角建てた家まで抵当に入れて、高利貸からお金を借りてしまいました。月六分と言えば百万円借りて六万円の利子です。いくら塾が繁昌してもこれではかかないません。

このようにして夫婦の間も全く断絶してしまい。兄弟親戚にも全

く信用を失い、文字通り行き詰まってしまうました。それでも競輪の魅力から逃がれることができず、どんな手段をつくしてもお金の工面をしようと、日夜そればかりに心を勞していたのだそうです。こんな工合ですから家庭も安らぎの場ではありません。妻子との接触には、針で刺されるような痛みを感じていたのだそうです。

ここまでの話をこのように筋書きだけにしてしまつては別段のことではありませんが、もともと人のよいM君がここまで引き摺り込まれて行く間に、どんなに反省をし、誘惑と戦ってきたか、一つ一つの体験談を加えて語られると、人間というものの救われ難い宿命というか業カルマというのか、人間に取り憑

いているどうにもならない浅ましい魔性を感じざるを得ないのです。そして同じ質のものが自分の中にも執拗に働いていることを感じさせられます。やつてしまつては後悔しながら、常習の悪事から足を抜くことができず、またしても盲目になつて、身を滅ぼす愚行を重ねてしまふ、あのおぞましい人間の心のカラクリをあらためて見せられる思いがしました。

「競輪に行く群集を見て、この人たちはどんな楽しみに惹かれて行くのだろうと私はいつも不思議に思うのだが。第一長い目でみればいずれは損になることはわかつている筈だ。それなのにあの人たちは、自分は儲かるかも知れないと思つて行くのだろうか」と訊いて

みました。するとその返事には驚きました。

「競輪の楽しみは損得とはあまり関係がないのです。だいたい場内に入ると五千円札でも一万円札でもお金という感じがなくなつて、紙片のよふ感じがしてしまふのです」と言つて、本当の面白さは別のところにあるのだ、と説明してくれましたが、競輪についての予備知識の全くない私には、むろん理解できませんでした。要するに、トバクと同じように普通には経験できない独特の強烈な面白さがあることだけはわかりました。その魅力は、あらゆる現実生活上の規制を無視させる魔力を含んでいることとは想像がつきます。その魔力に痺れさせられて、どんなに多くの

善良な夫や父が、罪もない妻や子を泣かせてきたことか、そしてこれほどわかり切つた、劇しい害悪を善良な庶民に加える悪魔的な事業を、自治体という公の機関がシヨバイとして営むことが許されるとは、いったいなんという浅ましい国柄だろう、と溜息をつかざるを得ません。何方か何十万かの善良な庶民の生活を破壊して絞り上げたお金で、チョッピリ公共事業を行ない、文化都市だと誇称する連中のアタマの組織はどうなつていゝのだらうかと疑いたくありません。その毒牙にかかったM君は、十数年のうちには吸い取られるだけ吸い取られ、いよいよ行き詰まりました。それでもまだどこかで金の工面をしようと、そればかりが

心を占めていました。そしてある日質屋に行った帰りがけに、パチンコ屋の前を通りがかりました。ガチャガチャという騒音が店の中から押し出して来るのを無心で聞いたM君は、急に「ああ、そうか」と思つたといふのです。

それと同時に、どうして自分はこの長い年月の間、競輪にあればほど夢中になれたのだらう、といふ妙な気がし、全く別の世界にいる自分に気がついたのでさうです。それ以来競輪には何の興味も感ぜず、競輪に行く群集を見るとつい先日まで自分もあの中にいたといふことが夢のように感ぜられ、それと同時にまだああして競輪の毒気に溺れている人たちが、たまたまなく気の毒に思えるようになった

というのです。

この転機によって新たな世界に出たM君は、あらためて自分の周辺を見直しました。先ず女房子ども兄弟親戚、この人たちに対して自分のしてきたこと、そしてその結果として今自分の置かれている状態——早く言えば、借金と不信に身動きもならぬ自分の姿をはじめて正視したのです。今は詫びる言葉もない。償う手だてさきも考えられぬ、ただ身しろぎもせず瞑目して坐り込むより仕方のない気持だと言います。そう言いながらM君は競輪とウソの重荷から開放されて、僅か三ヶ月ほどの間に、それまで迷惑をかけ続けてきた人々に諒解を得て、一応生活の建て直しができたというのです。

こういう話を長々とした末にM君はかたちを改めて言うのです。

「先生、僕は今、あの競輪の魔力に憑つかれていた人々が、気の毒でたまらないのです。あの人々の気持はよくわかるから、彼等をバカだとは思わない。ただ気の毒なのです。ああ、そっか」とただそれだけで魔力から解放されるのに、と思うと、どうしてあげたらいいのか思い惑わざるを得ないのです。自分も今まで、どんな人から言われても、アタマでは肯けても体が頑として応じなかった。だから、お説教ぐらいではどうにもならないことはわかっています。とするとどうしたらいいのでしょうか。それともう一つ、僕は愚かさのために犯してきた取り返しのか

ない自分の罪を償う道は、坐禅より他にないような気がするのです。僕は坐禅とは何だか知りませんが、しかし今の僕にできることは、坐禅より他にないような気がしてならないのです。

実はこの二つについて先生のご意見をうかがいたくて、今朝お邪魔したのです」

私は答えました。

「君が、まだ競輪地獄にいる人々を、なんとかして目を覚まさせてあげたいと思う気持はよくわかる。そしてこんな簡単なことだから、方法を以ってすれば簡単に気がつかせることができると思っのも無理はないと思っ。しかし実を言っ、君が経験した、ああ、そっか、は理屈や方法で達したものではありません」

い。ということは、それへ届く方法や理屈がないということなんだ。だから君のその気持はどうしようもないものなのだと思うんだ。張合いのない話だがこれは私の本音だ。

しかし私は君のその気持は願いとして大事にすべきだと思つたのだ。いや、それは君の願いなのだ。願いに違いない。尊い願いなのだ」
こんなことを言つて、私が近頃しみじみ泌々思つている人間の願いについて話しました。

私はこの四十年来、つまり寺子屋をはじめから今日まで、何によつて動かされて生きてきたのだろうと考えてみると、それは唯一の願いであつたことがわかるのです。自分が自力のはからいの行き

詰まりの果てに得たものは、自分と同じ苦しみを苦しみながら後から来る若い人に「さうではない、こうなんだ」と気づかせてあげたい、というたつた一つの願いだつたのです。そしてその願いの内容は、全く単純簡明なのです。だからこれを若い人に知ってもらふことは易しいことだと思ひました。

それで勢込んでやってみました。すべて無駄でした。そして遂にわかつたのは、それを伝えるのには方法がない、ということでした。

方法がないから計画が立ちません。私は四十年来計画というものは一切立てたことはないのです。すべて成り行きです。計画を立てる興味が湧かないのです。つまりどんなことも仕事として考えたことは

ないのです。塾もさうだし、一心寮もさうです。それはただ願いが形となつて現われたものに過ぎません。私は考えてみると、ただ願いによつてその日その日を生きて来ただけのような気がします。願いがどれだけ叶えられるかも考えたことがありません。そもそも願いというものは、自分から掴み取るうとしたり、形成しようとして出来たものではなく、自分のはからいや欲望の厚い層を突き破つて盛り上がってきたものですから、

その働きは私の尺度の外にあります。願いとはさういうものだと近頃ようやくわかつてきたのです。そしてこういうことがわかつて来るにつれて、私はお経の終わりに習慣的に読んでいる、

衆生無辺誓願度
煩惱無尽誓願断
法門無量誓願学
佛道無上誓願成

という四弘誓願の重さに驚き、その尊さに圧倒される思いがします。時々この誓願を持つ修行者を思つて涙を催すことさえあるのです。

こんな厳粛な壮大を極めた願とは比べものにならないとしても、小さければ小さいなりに、一人の人間の生涯を支配する願、というものの根の深さを感じるのです。

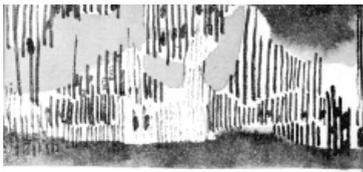
こんなことをM君に話して、「人間が本当の願に出会うということは、案外稀なことなのだから、君もその願いを粗末にしては

いけない。だけでもその願いを、自分勝手に実現することもできないのだということも知らなければならぬ。ただ願いを大事にし、それに委せて悔を残さぬように生きるより他はないと思うのだ」とつけ加えました。

最後に、

「坐禅については私にはよくわからないが、恐らく君の考えは正しいと思う。君の求むる坐禅は本当の往生のすがたかも知れない。だとすれば、それより他に懺悔さんげの道はなかるうと思う」と言っておきました。

M君のこれからの生活を刮目して期待しているわけです。



ばならないと思つ。

○危機感の緩和と危険の減少

昨年急激に表面化した米中・米ソ間の友好ムードによつて、核戦争の危機感が非常に少なくなつたことは、一応歓迎すべきことである。しかし人々の危機感の減少と危機そのものの減退とは必ずしも一致はしない。米ソ中の核装備が量質共に益々充実され、どの瞬間にも全能力を現実化し得る構えを崩さぬ事實は、人類絶滅戦争勃発の危険が少しも遠ざかつていないことを示しているのだ。

われわれは表面の変化にだまされることなく、核の危機が現実には消滅するまで倦まずに努力を続けなければ

○奪つ文明から奉仕の文明へ

われわれは核や公害による人類破滅の危機を正視することによつて、従来の奪つ文明を奉仕の文明に転換する契機を掴もうとするのである。その実践の要点は「自分がやる」という姿勢にある。

○日本こそ

われわれの主張の要点の一つは日本が新文明開拓のパイオニアの役を果たさうということである。そして日本はその任を果たすのに最適の国であると言つのである。

○マイホーム主義では不可

日本がこの重大な任務を果たすには国内の福祉向上に専念し、他国へ脅威を与えず、というマイホーム主義に止まっただけでは不可能である。積極的に国際福祉推進を国是とするのでなければならぬ。

どうしてこんなことが白昼堂々と行われるのか？

○憲法を空文として軍備に熱中。

○この国は憲法を持たぬ専制国か

○買占投機で十社が一千億円の利益。

インフレ。庶民の膏血は〇〇一家の手に札束となつて流れ込む。

○支持率一％になつてもやる、と豪

語し私製選挙法を強行しようとする

る総理大臣閣下のいる民主国家。

民主主義とはなんだつたのか。

わたしの考察その後

角純一郎

二十数年前、『個を超える精神性』についての『一考察』の中で、和田重正先生との問答を書き写させて頂きましたが、和田先生のコメントは私だけに発せられたものではなく、先生にご縁のあった方々皆様の共有財産である、と以前からずっと思い続けてきました。

拙い私の文を載せて頂いたこと
の目的は「和田先生のコメントは皆さんにお知らせしなければならぬ」という思い、まさにこの点のみでありました。

今回、文中の先生のお言葉を大文字に修正して、そこだけ飛ばし

読みも出来るように工夫致しました。

和田先生のコメントを再度拝読しますと、その秀逸さに毎回感嘆の念を抱かされます。先生のご自覚の確かさ故だと思えます。それと共に若かった自分の愚直さには読む度に苦笑いが込み上げて参ります。

また、和田重正先生にお世話になりながらの私の取り組みは、僭越ですが次の通り大まかにまとめさせて頂きました。ごく個人的な感想となっておりますこと、ご了承頂けましたらと思えます。

1 「悟りを求めて」

高校一年までは野球少年でした。「根性」では誰にも負けてはならない、という意気込みで没頭していましたが、自分を振り返る事が

できる年齢になったからでしょうが、スポーツの競争的な面に次第に疑問を抱くようになっていきました。勝ち負けの世界より他に何か大切なものがあるのではないかと内面世界の価値に心が向くようになっていきました。野球も辞め、学校の勉強にも意味を見出せず、劣等生として生ける屍のようになり、地元の海を飽かず眺め、人生論の本と、幾つかの神経症症状も併発してしまいましたので、神経症の治療法である森田療法の本ばかり読み漁っていました。

高校を卒業後すぐに百日間の入院森田療法を受け、自分の神経症の悩みは一段落したけれど、世の中を見回すと、戦争に行つて戦死したり、赤ちゃんが病気で亡くな

ったり、この世界にはいっぱい苦
悩が溢れている。

その一方では、妾を囲って欲望
三昧で百歳まで生きろ老人もいる。
これは不公平ではないか、不条理
なこの世の現実は何なんだろう？と
いう疑問が湧いてきました。

このことを解決しないと生きて
いけないような気持ち心が覆っ
ようになりました。

「人生とは何か」という疑問なの
ですが、それを考えていると、こ
の宇宙が存在しているように感じ
ているけど本当はどうか分からな
い、けれども存在している感じは
するので、その存在の意味は何な
のか、という疑問に集約されてき
ました。和田重正先生と接してい
ましたので、その答えはわかって

いました。「人間のアタマではわか
らない」ということなのですが。

先生に自分のその気持ちを尋
ねると、「人が出した答えでなく、
自分で行き着くところまで行かな
いと納得できないから、取り組ん
でみなさい。付き合っただげるか
ら」とのことでした。

そして毎日のように日記で人生
についての疑問を先生に質問する
日々が続きしました。和田重正先生
の仰る「自覚」とは「悟り」のこ
とでしようから、悟りを得ればす
べての苦悩から開放される、と思
って、それを求めて禅瞑想（正坐）
や畑作業、薪作り、草刈り、土の
う運びなど日常の作務に精を尽く
す日々でもありました。

2 「自力の果て」

ですが、気がつきが全く来ない……。
「悟り」のことですから、無心に
なる必要がある（無念無想という
意味ではありません）。だが無心
で坐ることが出来ない。悟りを求
めている限り無心ではないのです
から。悟りを得よう、得たい、と
いう自分の計らいの気持ちが無く
ならない。

そして、この世界に関する疑問
も次から次に湧いてきて尽きない。
こんな状態で長い年月が過ぎてい
きました。

人間、十年ぐらい一生懸命にや
っていると、それに行き詰まるよ
うにできているのでしょうか、そ
の頃はもうくたびれ果てるという

のか、「悟り」も忘れていっているような状態になっていました。

ある朝、和田重正先生に対して「もう質問はいいですよ」という言葉が出て寢床から起きました。

その同じ日の午後先生が亡くなられていた、という不思議な偶然の一致(共時的現象、シンクロニシティ)と思われる出来事もありました。師匠、和田重正先生に対する私の思い入れを表した現象だったのかもしれない。

そんなとき、ある気づきがありました。「今までは小さな洗面器の水の中に自分の顔を押し付けていたようなものだったんだ」と自分の自我の中での苦悩に藻掻いているだけだった、とわかりました。洗面器から顔を上げられた体験だ

ったかと思えます。

ここで若い頃からの苦悩からやっと息を吹き返したというか、これからも生きていける、という気持ちになれた一つの体験でした。

3 「自分なりの気づき」

その後、地元の大学院での心理学の修士論文執筆に際して、「個を超える」というテーマでの取り組みで、悟りに関する書籍を集中的に読み込んでいました。

その中には「悟りを求めていたら悟りは得られない」という重要事項に再び出会い、意識に留めている状態でした。

また、論文には自分の実体験からの考察もあると良いと思い、禅瞑想も普段の二倍の時間をかけて

いました。

そんな時の或る夜、睡眠中にもう一つの大きな気づきの体験がやってきました。眠っているときにドンツと気づきが向こうからやって来た、というような感じでした。

意識状態が薄れて、意識の奥の方から「ドンツ」というような感覚

普段は目で見て、これは茶碗だ、箸だ、とかいう“形”として、且つ、これは赤だ、緑だとか

“色”として、形や色として外界の現象を認識しています。この時はその働きが薄れて、形や色として現象界をとらえる以前の、色にも形にもならない、混沌とした宇宙の生命力の本体のようなものを感じたようでした。

そこでわかったことが、宇宙は

とてつもなく広い、と思われていますが、「宇宙は広くも狭くもない」ということです。

また、地球が出来てからも約四十六億年経っているとか言われますが、「時間もあるとか無いとかではない」ということ。

そして、形や色という現象をとらえるのでなく、宇宙の本体のようなものから観れば、いつでもその本体そのものなのであるから、「生も死もない」ということがわかりました。

個人の自我の立場を離れた認識だったかもしれないと思います。

4 「開放」

この気つきによって、誰が頭がいいとか悪いとか、その他あらゆる比較相対感覚から開放されて凄く楽になりました。時間の長短のような感覚の束縛から解放されたることによって、一歳で亡くなった赤ちゃんも、百歳近くまで生きた欲ボケ老人とも差がないのだと納得しました。

そしてこの時、感覚的な欲望(快感)からも距離を置けている自分になっていました。

そこで実感したのは(知識としては知っていましたが)、快感など感覚的な欲望は個体の保存と種の存続が目論まれて生物に仕掛けられているのだ。その仕組みに引きずられて、欲望をどれだけ満たしたか、が幸せの尺度のようになっていたが、快感からも離れてみると、それが幸せの尺度ではない

ことを思いました。

一歳で楽しい思いもあまりせず亡くなる赤ちゃん、妾を囲んで美味いものを食って死んでいく老人、差はないと納得しました。

また、「死」については、個人は無くなっても宇宙の生命力の中にならずと存続するわけだから、死への恐怖に対する考え方も変わります。

もし何かの重病に罹ったとして、助かる努力は懸命にしますが、それでも回復する見込みがないときには、「バイバイ、ちょっと早くお先に行っとくよ」と周りに言えるような気持ちになりました。

人間は、目とか耳とか五感のフィルターを通して世界を認識している、それを基にして人生観、世界観を主に作っているわけですが、

そのフィルターを通さずに世界を認識した時には、人間のあらゆる相対的な価値尺度から開放された、もう一つ別の観方を得られるのだと思います。体験的には難しいことではないと思いますが、言葉でわかりやすく説明するのは難儀なことかと思えます。

5 「平和な心」

また、この時、自分が平和的な心の態度になっていました。人から何か言われて、それに言い返してやろうとかではなく、融和的に反応したい心持ちです。

当時は地元の砂浜で大量のアサリが採れた年でした。日に二、三百個採っていて、余ります。母が「余りをパーマ屋に持っていきこ

か」と提案しました。近所のパーマ屋のおばさん、悪口ばかり言う人物で大嫌いでしたが、その時は不思議に「いいよ」と言ってしまっていました。

個人の自我にまつわる恨みや怨念のようなものも、吹き飛んでいく状態でした。

「ああ、人間には本来、平和的な心が奥に宿っているんだな、それがエゴイズムによって曇らせているだけなんだ」平和な心を外から身につけるのではなく、余計なエゴが薄らいでいくことが平和には肝要なのだと分かった次第です。

残念ながらこの状態は二週間程度に戻ってしまいました。そこが凡人の儂さです。和田先生はこの状態が一生続いた方だったのでし

よう。天才です。

凡人は謂わば「ノーマル」、天才は「アブノーマル」でもあります。普通で仕方ありません。

以前だったら、能力の足りない自分に気持ちが悪落ちていたでしょうが、比較のない精神状態に気づけたおかげで、「悟り」の深さにも差は重要ではないのだと思うようになりました。「悟り」を求めようと歩んでいること自体で平等だということですよ。

今でも普段、禅瞑想を心がけてあのような境地を実感できるように励んではいます。脳内のエゴの働きが薄らぐ方向です。

6 「宇宙の意味」

あとは、宇宙の存在の意味につ

いてですが、「意味はわからない」ということです。人間の知的合理性を満足させるような答えはないと思います。

人は物事を「こうこう、こう、だからこうなんだ」という具合に論理的、合理的に理解しようとする性質があります。

宇宙の長い歴史の中で人間の脳が出来たのはごく最近、そんな半端な偏りのある脳の性質を満足させるような成り立ちで宇宙は出来ていない、と思うようになりました。

理論物理学、天文学等から宇宙の存在の様子は今後も説明されていくでしょうが、その存在の「意味」は出てこないでしょう。

人間の知的合理性という働きがとってもチップケなものだと思っ

らです。人々は、そのアタマの知的合理性の範囲に感じがらめになって苦しんでいるのだと思います。

人間の外の宇宙を見るのではなく、内側の「脳」の方を調べることによって、ココら辺のことは解明されていくのではないかと思います。十年くらいアレコレ考えていると、「ああ、わからないんだな」という諦めが段々といつてきます。自分のアタマの脳力を自分のアタマが見限る、ということでしょうか。

『もう一つの間人観』（和田重正著 地湧社の巻末の「ピン公の話」が今では自分なりにですが、よくわかる気がします。

不条理な世界を生きていて、「何故こんなことがあるのだろう、苦

しい世界にいて、意味は何なのだろう」と迷う人は多いと思います。が、「わからないんだ」というところに行き着くとスッキリします。

わからないまま、わかるのではないかと答えを追い求めて迷っているより、随分と気持ちが楽です。

和田重正先生には、私の本質的でない現象のみに囚われた様々な質問に対して、また「自覚」に纏わる消息についての説明や取り組み方に、精魂込めてご指導下さったこと、心より感謝しております。そして、先生にご縁のある皆様に見て頂けるように、先生のコメントを残すことが私の役割でもあったと思っております。

二〇二四・二月

後記

・二〇二〇年二月、南極半島で史上初、摂氏一八・三度を記録した

・二〇二二年八月、グリーンランドの、アメリカ国立雪氷データセンター観測所（標高三二〇〇m）で史上初の雨が降り、降った雨は氷河の下に潜って流れ、例年の七倍の氷河が融解した

・史上最悪の干魃となったブラジル、アマゾン中流のマナウス近郊では支流が干上がって深刻な影響を受けている

・日本ではサバ缶が店頭から減少。近海では獲れなくなった魚がいる一方で、新種の魚が網に入るようになった

前号とミニに掲げた例はほんの一部ですが、今、世界各地ではこれまでに経験しなかった気候の変化が起きています。

これには①人間による温暖化行為の結果だという見方と、②地球の自然変化の一場面（サイクルの一端）だという見方があります。①と②の両方が影響しているのかもしれない。COP28は①に立って地球温暖化防止対策について討論を重ねてきました。

ロシアの対ウクライナ侵略戦争、ハマスのイスラエル奇襲と人質拉致に対するイスラエルの反撃、その他あちこちで紛争が起きていますが、これらについて人員も武器や弾薬も必要なお金も、よく供給されるものだと感じています。

対して温暖化対策については、取り組みが今一のように感じます。自国が未だ大きな影響が感じられていなかったり、影響があっても自国だけでは取り組めないなどが考えられます。

経済的には先進国に入る日本ですが電気を作るために石炭をホンボン焚いていて、ボイラー性能がよいにしても温室効果ガス排出量は少なくありません。COPからは毎回「化石賞」なる不名誉賞をもらっています。

①、②のどちらにあっても、人類が戦争や紛争に費やす物的・知的資源を、地球の温暖化防止（軽減）対策に振り向けることができたなら、未来はかなり明るくなるでしょう。人間の生き方も変わるでしょう。どのようにしたら、それができるといえるようになるのでしょうか。

平澤

和田重正に学ぶ会機関誌『ここに帰る』 第81号

令和6年4月1日 発行

発行者 〒399-3301 長野県下伊那郡松川町上片桐1352
和田重正に学ぶ会 平澤 正義

和田重正に学ぶ会ホームページ <http://wadashigemasa.com/>

和田重正に学ぶ会 会費は年二千元 『ここに帰る』バックナンバー お分けします(有料)

◇◇ 当会活動資金へのご寄付 大歓迎 ◇◇